

## 討論 2

石井 由香 静岡県立大学

私は移民研究をしておりまして、フィールドの一つがマレーシアです。本日のご報告は、三つとも非常に興味深く聞かせていただきました。しかも根本先生がそれぞれのご報告に関してたいへん的確な要約をしてくださりましたので、私のコメントとしては、まず篠崎香織先生のマレーシアのご報告に関して、3点ほど質問も兼ねてお話をさせていただきます。斎藤紋子先生、高田峰夫先生のご報告に関しては、一点質問を兼ねて共通する内容をコメントさせていただこうと思います。

### ■「マレーシア人意識」の醸成と

#### ロヒンギャへの好意的世論形成をどう捉えるか

マレーシアでいわゆるロヒンギャ問題に関して好意的な世論が形成されており、マレーシアが対外的にも主張する一つの背景として、やはりマレーシアはかなり経済発展が進んでいる国であり、そのなかで、人権意識や人道という議論の担い手になる中間層——「市民社会的な意識を持つ人」と言ってもいいのかもしれませんが、こういった人たちが増えてきているということがあると思います。イスラム教という共通性に加えて、階層性というか市民意識や市民社会の形成があることから、このようなロヒンギャの人たちに対する好意的な世論が形成されていると考えていいのではないのでしょうか。

じつはマレーシアのエスニック関係に関しても、マレー人と非マレー人とのあいだの関係にはしばしば対立の構図があって、マレー人を優先するブミプトラ政策と呼ばれる政策が実施されてきたなかで、両者の関係には微妙なところがあります。

しかし、経済発展を比較的順調に遂げてきて、そのなかで中間層、マレー人であれ非マレー人であれ一定の教育を受けて豊かになってきている層が確実に形成されている。そのことが、エスニック関係においても、ある種の「マレーシア人意識」、共通の問題に直面しているという、ある意味でエスニック集団を超えたような意識と言うのでしょうか、そういった市民意識の形成に繋がっているようなところはあるように思われます。そのことと今回のロヒンギャの人たちへの対応を

同じような文脈で捉えることができるのかどうかを、一つ目の質問とさせていただけたらと思います。

また、東南アジアには、世界的に見ると経済発展が順調な国がいくつかあります。他の国でもこのような世論が形成されるといった、なんらかの動きが出てくるような可能性があるのか、それはマレーシアの状況とどう違うのかといったことについても、もし何かございましたら、これは篠崎先生だけではないかもしれませんが、コメントをいただければ幸いです。

### ■ マレーシアにおける「受け入れ」の意味

#### — 政治的メンバーシップの付与との違い

二つ目の質問は、「受け入れ」という言葉が使われるのですが、この「受け入れ」の意味は何かということですが、それは、外国人として、もしくは他者として扱わないということだとすると、たとえば市民権を与えることでしょうか。イスラムの評議会、NGO、それから華人の野党にしても、今日ご報告いただいた限りの話で言うと、ザカットや一時的に現在の滞在に多少役立つ程度のお金を出すなどの支援をするという話ではあると思いますが、あくまでもそれは難民支援の話で、それをマレーシア社会の政治的なメンバーシップの付与とイコールというように考えて、それぞれのアクターが主張し行動しているというのは、少し違うのでは気がするのです。

根本先生からも、下層労働者として期待しているところがあるのではないかというお話がありました。マレーシアは、国民と外国人労働者とは完全に別で切り分けているわけで、外国人労働者はもちろん市民・国民と同じ権利があるわけではまったくありませんし、別のもと考えていて、国民と外国人労働者の関係はいわゆる民族間関係、エスニック関係とは違う。

相互扶助の枠という言葉もあったと思いますが、とくにイスラムの相互扶助、マレー人の相互扶助の枠の中で扱うというだけであれば、社会的に支援はするけれども政治的にメンバーではないという扱いだとすると、マレーシア全体のエスニック関係からすると、それほど大きな話ではないからそれならばいい、ということにもなるのではないかと思います。この点に

ついて、ご説明をお願いいたします。

### ■ 既存のロヒンギャ・コミュニティの現状とマレー人コミュニティとの関係は

三つ目の質問は、1980年代からすでにロヒンギャの人たちがマレーシアに入ってきていたというお話があったと思いますが、いわゆるロヒンギャのコミュニティはマレーシアでどのように形成をされていて、そのことが昨今問題になっているロヒンギャの人たちの大量の出国およびマレーシアへの流入とどのように関わっているのか、ということです。

それと、ロヒンギャのコミュニティが、マレーシアの国内、社会の世論形成にある程度働きかけるような動きがあるのかどうか。それから、マレー人のコミュニティとの連携といったことがどの程度あるのかについても、ご教示いただければと思います。これがマレーシアに関する私のコメント兼質問です。

### ■ ミャンマー国内でどのようなかたちでの対話が可能なのか

ミャンマーとバングラデシュのご報告については、共通する内容の質問を一つさせていただきます。どちらの国もいわゆる人権問題としてのロヒンギャ問題、とくに国際問題になっている部分に関しては、当事者だけでも当事者意識を持っていないといった状況であると思われま

す。ミャンマーのご報告では、最後のところで「国民のあいだでの議論が必要ではないか」というお話がありました。その国民のあいだでの議論というのは、どのようなかたちで可能なのかということに関して、斎藤先生からもう少しご説明をお願いできればと思っております。

たとえば、国政レベルで決まっている話も、地方レベルになるとどのくらい浸透しているのか。新聞での論調につきましても、その新聞は誰が書いて誰が読んでいるのか。言論統制もありますし、読み手、理解できる人は誰かということもあります。また、ミャンマーにおいてもとくに民政移管後は、民主化ということに関してかなり議論がされていると思われま

### ■ バングラデシュで国が人権問題として対応し人権問題として世論が形成されることは可能か

バングラデシュに関しては、バングラデシュが当事

国なのかどうかは、なかなかこれも微妙なところがあると私も思います。そもそもバングラデシュでは、地域的なことも含めてロヒンギャの問題は周縁の問題であるということでした。そうしたなかで、バングラデシュで国が人権問題としての対応を行うことや、人権問題として世論が形成されるといったことが可能なのか。もし可能であるとしたらどういった方向性があり得るのか。もしかして具体的な動きがすでにあるのかといったことについて、高田先生からお話をうかがえればと思います。よろしくお